

## 鈴木鉀三編 『靈樹山耕雲寺六百年誌』

平成七年（一九九五）九月に新潟県村上市在住の郷土史家である鈴木鉀三氏より七一頁に及ぶ一冊の大書をお贈り戴いた。大著の名は『靈樹山耕雲寺六百年誌』であつて、平成六年（一九九四）九月の耕雲寺開創六〇〇年大法要の記念品として、平成七年四月一日に刊行されて有縁の道俗に分与されたものである。

靈樹山耕雲寺は新潟県北の三面川中流域の村上市門前（古く越後瀬波郡杠沢）に存し、いうまでもなく越後（新潟県）曹洞宗の「四箇道場」の筆頭として曹洞宗太源派の傑堂能勝（一三五五—一四二七）によつて応永元年（一三九四）に開創された古刹であり、能勝は勧請開山に越前（福井県）の平田山龍沢寺開山の梅山開本（？—一四一七）を迎え、自ら第二世に就いている。

そもそも能勝は建武中興に勲功のあつた猛将、楠木正成（楠公、？—一三三六）の俗孫として生まれており、太源派の開本に嗣法して後、越後北部に到つて耕雲寺を建立し、越後一國のみならず、出羽（山形県・秋田県）や会津（福島県）など東北南部から常陸（茨城県）など関東北部における曹洞宗の発展に大きな貢献をなしたこ

とで知られている。

耕雲寺とともに越後四箇道場に名が挙げられる中蒲原郡村松町の滝谷山慈光寺、南魚沼郡塩沢町の金城山雲洞庵、西蒲原郡岩室村の福地山種月寺はすべて能勝や法嗣の南英謙宗（三謙翁、一三八七—一四五九）ないし顕窓慶字（？—一四三三）を開山に仰ぐ太源派の名刹にほかならない。越後曹洞の諸寺院の半数近くをこの能勝の系統（傑堂派）が占めており、耕雲寺はその頂点に君臨する大本寺として大きな影響力を占めてきたわけである。

また能勝は宗旨参究の面で大きな貢献をなし、謙宗とともに当代を代表する学究の徒として中世曹洞宗の五位思想の基盤を作つた禅者として名高い。能勝・謙宗ら北越の地に集つた曹洞禅者は、京都・鎌倉の五山叢林の禅文学すなわち五山文学（禅の漢詩文）の素養を継承しつつ、五山の詩壇の学風に飽きたらず、真摯に禅旨の究明を志して曹洞宗に転じた人であり、中国曹洞の五位の宗旨を研鑽することにその生涯を捧げている。室町期の耕雲寺ないし種月寺こそ、まさに曹洞宗旨・五位思想を参究する拠点として、当時として

佐藤秀孝

は辺境の越後の一角に一大学府を形成していた林下の叢林だったのである。

この能勝と謙宗による学究・研鑽の成果を一同にまとめたものこそ、今回の鈴木氏編集になる『靈樹山耕雲寺六百年誌』なのである。今般、鈴木氏によって耕雲寺関係の資料とりわけ能勝・謙宗に関する著述や語録などがまとめられた意義は曹洞宗の地方展開史の面からはもちろんのこと、中世禅宗思想史の研究の上でもきわめて高く評価されて然るべきものであろう。

かく言う私自身も新潟県の出身であり、しかも曹洞宗の法脈（人法）として能勝の系統に連なる一員となっており、そうした縁もあってかつて曹洞宗宗学研究所編『道元思想のあゆみⅡ』（吉川弘文館刊）において「傑堂」の項目をまとめる機縁に恵まれたことがある。その際、私は鈴木氏とは直接に面識はなかったものの、書面を通して靈樹山耕雲寺大遠忌奉讃会『二祖傑堂能勝禅師五百五十回大遠忌記念誌』や慶字撰『傑堂能勝和尚大禅師行実録』をはじめとする研究書・研究論文や能勝関係の諸史料の提供を受けるなど、鈴木氏より諸般の便宜を得ており、爾来、鈴木氏とは懇意にさせて戴いている。その面で私もまた今回、鈴木氏が編集された『靈樹山耕雲寺六百年誌』の刊行を心より喜ぶ者の一人なのである。

そもそも在俗の郷土史家である鈴木氏が禅門の専門書である本書を編纂するに至った経由とは、如何なるものであったのか。鈴木氏は耕雲寺の膝下ともいふべき村上市飯野に住み、郷土史家として地元の歴史に大きな興味を懐いておられたという。新潟県の曹洞宗の歴史に占める耕雲寺の位置は絶大であって、多くの門葉寺院を抱え

る中心寺院として越後曹洞の源流の立場を維持してきたのである。当然、村上市で郷土史に志す者にとって、耕雲寺は外すことのできない歴史的遺産なのである。

古来、越後の上越の地には親鸞（愚禿、一一七三—一二六二）が流された縁故から浄土真宗（一向宗）が盛んであり、佐渡には日蓮（蓮長・是聖房、一二二二—一二八二）が配流となったことから、由緒ある日蓮宗の史蹟・寺院が存している。これに比して、越後の禅宗はそのほとんどが曹洞宗寺院（八〇〇余箇寺）によって占められ、曹洞宗一色の感があるものの、これを彩る人物としては江戸末期の詩僧、大愚良寛（一七五八—一八三一）のみが特筆される傾向が顕著である。しかしながら、かつて能勝と謙宗は中世越後を代表する禅者として耕雲寺を中心に独自の禅風を振っていたのであり、その立場は久しく歴史の彼方に埋没していた感があったが、いま少し顕彰されてしかるべきものがあるろう。そんな切なる願いを込めて鈴木氏が一書にまとめた大著こそ本書なのである。

しかるに実際のところ、耕雲寺に現存する能勝・謙宗に関する著述資料または寺の変遷などに関する歴史史料はきわめて少ない。それは度重なる回祿（火災）によって伽藍が炎上し、貴重な資・史料が焼失あるいは散逸したことにならんでいる。耕雲寺を調べていく中で、資料の不足を痛感した鈴木氏は耕雲寺先住の祥雲洪嗣和尚との約束を果たすべく東奔西走して能勝・謙宗ゆかりの寺院などを経巡り、埋もれていた耕雲寺関係の貴重資料の収集に尽力したわけである。こうして一介の在俗の学究の徒であった鈴木氏の熱意によって本書はまさに成ったのであり、禅学・禅宗史の専門家でもない鈴木氏が独学で究めて一書を成したところに、その類希なる才腕と、

能勝・謙宗に寄せる熱き思いを窺うことができよう。

では、本書の構成は具体的に如何になっているか、この点について触れておきたい。

巻首には曹洞宗管長・大本山総持寺貫首であった梅田信隆禪師が「祝詞」を、また耕雲寺直末会会長で種月寺住職の寒河江眞爾老師が「耕雲寺六百年誌の上梓を祝して」を、さらに耕雲寺住職（守塔比丘）の山本宗彦老師が「発刊のことば」をそれぞれ寄せている。ついで「目次」に基いて本書の構成を列記するなら、およそつぎのようである。

### 耕雲寺小史

### 史 伝

- 開山梅山闍本禪師
  - 二世傑堂能勝禪師
  - 監寺頭窓慶字禪師
  - 三世南英謙宗禪師
  - 四世瑚海仲珊禪師
  - 五世徳嶽宗欽禪師
  - 六世大安梵守禪師
  - 七世審巖正察禪師
  - 八世固剛宗巖禪師
  - 九世天初藥源禪師
- 語 録
- 耕雲傑堂和尚之入室
  - 秘密正法眼蔵註解

鈴木鉀三編『靈樹山耕雲寺六百年誌』（佐藤）

重離疊變訣

偏正五位図説詰難

參同契・宝鏡三昧解

骨董証道歌

根脚七道語訣

伝法偈下語

義山和尚法語著語

自价至鑑―五燈会元―

頭訣耕雲註種月擲蕪藁

洞上雲月五位秘訣附録

碧巖事考

南英謙宗禪師語録

示衆

三易讎技战激語

尖活説

鼓缶軒記

続鼓缶軒記

玉漱軒記

瑚海仲珊禪師「七夜話」

耕雲慈堂老衲之法語

所蔵古文書

梅山闍本遺戒狀

待鳳軒口伝書

靈樹山耕雲寺日用清規

法位餅之事

社澤三社記

書状

寺領寄進状

耕雲寺領納所方田帳

訴状関係

参考資料

明治十六年、新潟県への書上

昭和十二年当時の耕雲寺

年表

あとがき

以上のごとく、その内容としては大半が資料集となっており、およそ今日、知ることのできる耕雲寺および歴住の著述に関する諸資料を網羅せんとしたものといつてよい。したがって、本書はそのタイトルのごとく耕雲寺の通史を分かり易く一般向けにまとめたような概説ではなく、あくまで「耕雲寺関係資料集」として後世に遺すことを意として編集されているわけである。

「耕雲寺小史」ではきわめて簡略ながら、傑堂能勝の事跡を中心に耕雲寺六〇〇年の歴史を概観している。楠木正儀の子として生まれた能勝（俗名は正能）は、戦場で負傷したことから臨済宗法燈派の古剣智訥（仏心慧燈国師、？—一三八二）に和泉（和歌山県）高石の赤松山大雄寺に投じて出家し、丹波（兵庫県）丹根境の青原山永沢寺において通幻寂靈（一一三二—一三九二）に参じて曹洞宗旨を学び、やがて越前（福井県）の平田山龍沢寺に到って梅山聞本に嗣法している。その後、能勝は応永元年（一三九四）に越後瀬波郡

杠沢に到って耕雲庵を結んでいるが、これが耕雲寺の始まりであり、後世、寺紋は楠木氏ゆかりの「菊水」の紋を使用している。

「耕雲寺小史」で注目すべきは、江戸末期の全苗月湛（洞水、一七二八—一八〇三）が著した『五位頭訣元字脚』の記事に基づいて、能勝が応永一七年（一四一〇）頃に明国に渡航したと解していることであろう。すなわち、在期中に寧波（浙江省）鄞県の天童山景德禅寺の南谷庵（如浄の廟所）に輪差した際、能勝は『五位頭訣』を得てこれを日本に持ち帰り、以降、本格的な五位の研究をなしたと解している。能勝の法嗣の南英謙宗や法孫の瑚海仲珊（中珊とも、一三九〇—一四六九または一三九三—一四六九）らが明確に渡明した事実が知られるのに対して、能勝のそれは他に傍証する史料がないだけにいまだ確定的な事実とはいえないが、注目される見解ではあろう。

また「耕雲寺小史」につづいて「耕雲寺歴住と直末寺（勸請を含む）」を付して、開山梅山聞本・二世傑堂能勝より第五〇世大疇洪嗣ないし当代（現住）の山本宗彦氏に至る歴住名と示寂年時および開山寺を挙げている。耕雲寺歴住が開創した直末寺は実に七箇寺に及んでいる。

つぎに「史伝」として史料の残る耕雲寺初期の住持の足跡を収録している。すなわち、「御開山梅山聞本禅師」「二世傑堂能勝禅師」「監寺頭窓慶字禅師」「第三世南英謙宗禅師」「第四世瑚海仲珊禅師」「第五世徳嶽宗欽禅師」「第六世大安梵守禅師」「第七世審巖正察禅師」「第八世固剛宗巖禅師」「第九世天初薬源禅師」として、勸請開山の梅山聞本より第九世の天初薬源（一四五—一五二四）

に至る耕雲寺一〇代の消息を『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』『日域洞上諸祖伝』『日本洞上聯燈録』などの燈史・僧伝その他より収録している。この中で監寺の頭窓慶字は、現在の歴住世代には名が載せられていないが、能勝の後席を継いで耕雲寺に住した高弟であり、滝谷山慈光寺や金城山雲洞庵を中心に活躍した人である。とりわけ、二世（実質開山祖師）の能勝と三世の謙宗それに四世の仲珊の三禅者に関しては、個別の伝記史料を挙げてその紹介に努めている。

傑堂能勝については、とくに謙宗撰『耕雲種月開基年代并傑堂和尚行状』所収「傑堂和尚行状」と常陸（茨城県）耕山寺所蔵の仲珊撰『傑堂能勝禅師伝記』と『生駒良遍師孝導国字抄唯識大意』所収「能勝禅師伝」と鶴岡市洞春院所蔵の慶字撰『傑堂能勝和尚大禅師行実録』および『常陸志料雑記』『新編会津風土記』の能勝関係記事と『新編会津風土記』所収の謙宗撰「(天寧寺)開山傑堂行状」を挙げている。

南英謙宗については、謙宗自撰の『耕雲種月開基年代并傑堂和尚行状』と旧耕山寺所蔵『種月南英謙宗和尚行業記』および『新編会津風土記』収所の遠天統文撰「(天寧寺)第二世南英行状」を載せている。

また仲珊については旧耕山寺所蔵『瑚海中珊和尚行業記』を収めているが、これは他の燈史・僧伝の記事と相違している点で疑問の多い史料である。

これらの中でいくつかは従来ほとんど知られていなかった伝記史料であり、『曹洞宗全書』『史伝』や『読曹洞宗全書』『史伝』などにも収録されていない貴重なものも存している。鈴木氏はすでに

『一祖傑堂能勝禅師五百五十回大遠忌記念誌』において「傑堂能勝禅師伝記資料と若干の考察」などの論考をなしておられたわけであるが、本書によって能勝・謙宗・仲珊らの伝記史料が一同に活字化された意義は大きい。

さらに「語録」としては、能勝・謙宗を中心に耕雲寺ゆかりの禅者の著述・語録その他を収録しており、本書の分量の大半を占めていることから、いくぶん詳しく記しておきたい。

はじめに傑堂能勝のものとして『耕雲傑堂和尚之入室』と『秘密正法眼蔵註解』を収めている。『耕雲傑堂和尚之入室』一卷一冊は、単に『傑堂和尚之入室』ともいい、村上市の大滝正輔氏の所蔵になるもので、能勝が門下の諸禅人と交わした問答商量の記録である。本書の伝承は定かでないものの、能勝が耕雲寺に集った多くの学人と直接に交わした問答を、きわめて素朴かつ禅味に溢れた筆致で記しており、今日、謙宗の筆跡と見られている。中世の林下叢林の真摯な学究の息吹きを伝える貴重な禅宗資料といつてよい。

『秘密正法眼蔵註解』一卷一冊は、瑩山紹瑾（一一二六—一三二五）が編した『秘密正法眼蔵』に対して、能勝が註解を施したものである。『秘密正法眼蔵』は「拈花微笑」「門前刹竿」「廓然不識」「聖諦亦不為」「無情說法」「六外一句」「倩女離魂」「托鉢下堂」「枕子」「道不会」という一〇則の古則公案に対して、能登（石川県）の洞谷山永光寺の紹瑾が拈提をなしたものであるが、『秘密正法眼蔵註解』はそれに対して越後の能勝がさらに一々に「判云」「代云」「拶云」「打云」「跋云」といった拶語・代語などのかたちで自らの見解を示しており、中世曹洞宗の公案参究資料としては古く貴重であ

る。しかも能勝のものともに漢文資料であり、後に曹洞宗の門参資料の主流となる仮名抄物でないところにその特徴が存しよう。すでに本書は『続曹洞宗全書』『注解一』に活字化されている。

つぎに南英謙宗のものとしては大部の著述・語録が伝えられており、鈴木氏はそれらをおおむね本書に収録している。

『重離疊変訣』一巻一冊は、『洞山宝鏡三昧重離疊変訣』ともいい、駒沢大学図書館に所蔵されている。中国曹洞宗祖の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）の『宝鏡三昧』にある「重離六交、偏正回互、疊而為<sub>レ</sub>三、変尽成<sub>レ</sub>五」のことばを注解したもので、曹洞宗の宗旨としての五位説を述べようとしている。末尾に『曹洞宗全書』『注解五』に所収される『重離疊変訣』に基づいて文安三年（一四四六）二月に謙宗（紫陽謙々叟）が撰した跋文を載せている。なお駒沢大学本は享保一三年（一七二八）に蔵山良機（？—一七二九）が発見して筆写したものであり、良機の跋が付されている。

『偏正五位図説詰難』一巻一冊は、南北朝時代に臨濟宗幻住派の無尽省燈（幻化道人）が撰した『偏正五位図説』における偏正五位の理解に対して謙宗が詰難をなしたものである。底本は駒沢大学図書館に所蔵される寛文八年（一六六八）刊本であり、『曹洞宗全書』『注解五』に所収される。宝徳三年（一四五二）九月九日（重陽日）に撰した謙宗の自跋が存している。省燈は幻住派の明叟斎哲（？—一三四七）の法嗣で、曹洞宗宏智派の東陵永瑛（一二八五—一三六五）に曹洞五位を学んだ人であるが、謙宗としては省燈が五位を安易に易学に同じて解釈したものだと言難している。

『参同契・宝鏡三昧解』一巻一冊は、正式には『参同契宝鏡三昧種月英和尚所解』と称し、唐代の石頭希遷（無際大師、七〇〇—七九

〇）の『参同契』と洞山良价の『宝鏡三昧』に対して謙宗がなした所解である。末尾に康正三年（一四五七）孟春に出羽（山形県）大泉庄の国見山玉川寺玉漱軒で書した謙宗の跋文が存している。跋では宏智派の雲外雲岫（一二四二—一三二四）の『宝鏡三昧玄義』との異同が指摘されている。底本は安永二年（一七七二）に華翁が書写した岸沢文庫所蔵本であり、従来、活字化されていなかっただけに貴重である。

『骨董証道歌』一巻一冊は、六祖下の永嘉玄覺（無相大師・一宿覺、六七五—七一三）の『証道歌』に対する謙宗の注解である。『耕雲種月謙宗注解』とあるから、謙宗が耕雲寺住持期に撰したものと見られる。『証道歌』を句ごとに注解したものであり、二句づつを挙げて先人古徳の拈提を列した後、謙宗が自らの注解を施している。底本は山形県米沢市李山の宝高山長泉寺（高寺）に所蔵されている貴重本であって、出羽（山形県）普濟寺七世の快翁存慶（？—一六一三）が天正八年（一五八〇）二月に桂谷寺において筆写し、さらに同国光岳寺一七世（樵睡堂）の任翁益運（？—一七四九）が書き継いだものであり、耕雲一派の秘書として伝えられたとされる。本書は『続曹洞宗全書』『注解二』に収録されている。

『根脚七道語訣』一巻一冊は、正式には『疎山仁禪師根脚語訣及七道語訣批評』といい、『疎山大師根脚七道語訣』とも称される。『疎山仁禪師根脚語訣』と『七道語訣』はともに洞山良价の法嗣である唐末五代の疎山匡仁（矮師叔）の示衆・問答であり、これに謙宗が批評を加えたものである。本書の底本は正徳四年（一七一四）秋に勢陽の密峯雲が序を付した駒沢大学図書館本である。匡仁に関する資料としても貴重であろう。ちなみに宮城県仙台市の金剛宝山輪王

寺にも謙宗の評釈した『疎山大師根脚語決』一巻が所蔵されている。

『伝法偈下語』一巻一冊は、歴代仏祖の『伝法偈』に対する謙宗の著語であり、底本は駒沢大学図書館所蔵本である。過去七仏から西天二十八祖・東土六祖に至る伝法偈を挙げ、これに謙宗(種月)が著語をなしており、さらに青原行思より以降の祖師については、機縁の語句や問答・示衆などを挙げて、これに著語を加えている。とくに永平道元・永平懷奘・大乘義介・洞谷瑩山瑾・惣持峩山碩・仏陀大源真・龍沢梅山聞本・耕雲傑堂勝という日本曹洞の歴代祖師(太源派)に関する部分是他に見られない興味深いものがある。永正一三年(一五一六)五月に永平寺において書写されているが、筆写した禅者は定かでない。

『峩山和尚法語著語』一巻一冊は、大本山総持寺第二世の峨山韶碩(一二七六一—一三六六)の『峩山和尚法語』に対してなした謙宗(種月)の著語である。本書は「峩山和尚夜法語并種月開山着語」とも称され、短編ながら鈴木鉀三氏自身の所蔵になる貴重本である。從來、知られている韶碩の法語がすべて仮名法語であるのに対して、本書にて種月寺の謙宗が著語した『峩山和尚夜法語』は漢文で著されており、その面では韶碩の語句を伝えるものとしても貴重な新出の資料である。

『自价至鑑(五燈会元)』一巻一冊は、曹洞宗祖の洞山良价より南宋初期の雪竇山足庵智鑑(一一〇五—一九二)に至る中国曹洞宗の祖師の機縁や問答を『五燈会元』より抽出し、これに謙宗(種月)が著語を付したものである。底本は耕雲寺所蔵であって、慶安四年(一六五一)に耕雲寺第二二世の連外松徹(一六一三—一六六

一)によって書写されており、昭和五〇年(一九七五)に発見されている。本書で扱われている祖師は洞山良价・曹山本寂・雲居膺・曹山慧霞・同安丕・同安志・梁山縁観・大陽玄・投子義青・芙蓉楷・丹霞淳・天童宗珏・雪竇智鑑であり、直系の祖師のほかに本寂と慧霞を挙げているのは両者が五位の宗旨に深く関わっているためであろう。この一四人の祖師の悟道の機縁や問答・上堂などを載せ、これに謙宗が一々に著語を付している。

『頭訣耕雲註種月摟摟』三巻は、唐末の曹山本寂(元証大師、八四〇—九〇一)の高弟である曹山慧霞(後曹山・了徳大師)が述べた『五位頭訣』に対して、耕雲寺の能勝(耕雲先師)が評註を、また種月寺の謙宗(種月)が摟摟(注解)を施したものである。洞山五位・曹山逐位頌・別揀五位・曹山五位君臣・洞山五位功勳・曹山五相頌・洞山宝鏡三昧註・偏正回互・四禁頌・曹山三種頌・曹山四種異類など洞山良价・曹山本寂の宗旨について、それぞれに注解を施しており、耕雲寺における五位思想の集大成といふべき大著である。底本は種月寺所蔵の謙宗自筆本であり、正徳四年(一七一四)に寂然恵空によって上梓されている。『曹洞宗全書』「注解五」には享保元年(一七二六)刊本が所収されている。『頭訣耕雲註種月摟摟』は別に江戸期に風外焉知(？—一七二二)によって校定されて『洞上雲月録』三巻として刊行されているが、内容にはかなりの異同が存している。

『洞上雲月五位秘訣附録』は、岸沢文庫所蔵の『洞上雲月録』の付録からの抜粋であり、『宝鏡三昧』の「重離六爻、偏正回互、豊而為三、変尽成五」のことばを謙宗(秘沢杜多)が注解したものである。秘沢とは謙宗が住持した常陸(茨城県)の秘沢山耕山寺のこ

とであろう。

『碧巖事考』一〇巻は、一に『碧巖抄』ともいい、種月寺の謙宗が北宋末期の圓悟克勤(仏果禪師、一〇六三—一一三五)の『碧巖録』一〇〇則に対してなした事考である。各則ごとに難解な語句について漢文で厳密な説明・典拠を付したものであり、底本は村松町の慈光寺に所蔵されている。謙宗真筆とされる全一〇冊に及ぶ大部の著述であるが、五冊から八冊までを欠く零本であって、残存しているのは六冊分のみである。元来、折本であったものを冊子本に装幀を改めている。中世曹洞宗における『碧巖録』に関する本格的な事考として詳細な語句の説明をなしている点で注目され、謙宗の博識が偲ばれる。とくに表紙題箋に「謙宗真筆碧巖事考」とあり、また第一冊表紙裏に「御自筆(此内他筆有) 主宗伊書刊」とあって、耕雲寺第一世の三心宗伊(？—一五五七)が謙宗の真筆であることを証明している。

『南英謙宗禪師語録』一卷は、編者が不明ながら謙宗の平生のこゝばを編集した語録であり、種月寺所蔵のものを『越佐史料』所収本で補っている。最初に「示衆」として示衆・偈頌などを集めているが、これは謙宗の事跡や学人接化のありさま、諸禅者・檀越らとの関わりなどを知る上で多くの事実を提供している。さらに付録として「三易讎技毘語」「尖活説」「鼓缶軒記」「続鼓缶軒記」「玉漱軒記」を収めている。「三易讎技毘語」は謙宗の六八歳のときの著述であり、自らの参学・研鑽の軌跡を振り返っている。「尖活説」は康正二年(一四五六)孟春に種月寺の鼓缶軒で書し、九州の菊池殿に示したものである。「鼓缶軒記」は享徳二年(一四五三)暮春に、「続鼓缶軒記」は享徳四年六月に、それぞれ鼓缶軒で記されている。

「玉漱軒記」は康正元年(一四五五)八月に出羽大泉庄国見山玉川寺にて記され、道元門下の高麗僧了然法明(？—一三〇八)ゆかりの善見山玉泉寺を玉川寺として復興した消息が記されている。これら謙宗のことばや思想を知る上でも、また足跡を知る上でも貴重であり、とくに「続鼓缶軒記」は謙宗自筆のものが種月寺に所蔵されている。なお、岸沢文庫にも『種月開祖南英謙宗和尚語録』一卷の写本が所蔵されている。

総じて謙宗の著述・語録には中国禅とくに曹洞宗旨に精通したものが多く、すべて厳格な漢文資料であって、謙宗の漢詩文や祖録に対する素養の深さを如実に伝えている。なお、謙宗にはほかに『信心銘括錘』一卷や『鼠璞辨』一卷なども存したとされるが、残念ながらいまに伝えられていない。

第三代の瑚海仲珊のものとしてはわずかに『七夜話』一卷が収められているにすぎない。『七夜話』は茨城県常澄村の俱胝山六地藏寺(真言宗)所蔵のものであり、仲珊のものと推定されている。これは文中に「享徳二年癸酉冬、今年夏予居南陽菴、故関也」とあるのが、「瑚海中珊和尚行業記」に「即大宋景泰四年癸酉、当日本享徳二年癸酉、六月七日、帰越耕雲。七月十二日、東関南陽庵来」とある事実などに符合することによる。内容は曹洞宗旨の著名な語句について「代」「学」「他」などのかたちで注解を試みている。

そして、最後に『耕雲慈堂老衲之法語』二巻を収めているが、これは駒沢大学図書館に所蔵され、耕雲寺の慈堂がなした法語(香語)や偈頌さらに道号頌を集めたものであり、慶長九年(一六〇四)一〇月に長全によって書写されている。巻一の冒頭に「審嚴和尚三年忌之香語」があり、耕雲寺第七世の審嚴正察(？—一五〇二)



の三回忌がなされていることや、「贈普濟寺」の偈頌が存していることなどから、慈堂とは正察の法嗣で耕雲寺第八世や岩船郡朝日村大場沢の普濟寺開山となつている固剛周敵(？—一五二七)のことであろうと推測される。

「所蔵古文書」としては、「梅山開本遺戒状」「待鳳軒口伝書」「靈樹山耕雲寺日用清規」「法位餅之事」「杜澤三社記」「書状」「寺領寄進状」「耕雲寺領納所方田帳」「訴状關係」を収めている。

「梅山開本遺戒状」は、梅山開本が応永二二年(一四一五)一二月一八日に越前龍沢寺の後事を能勝や如仲天閻(一三六五—一四四〇)ら四門人に委ねた際のものである。「待鳳軒口伝書」は、安永四年(一七七五)四月に待鳳軒の慧燈の代にまとめられた朝課・祖堂諷經・日中諷經・晚課・待夜・諸諷經・金点之事などの指南書である。「靈樹山耕雲寺日用清規」は、嘉永四年(一八五二)仲秋に耕雲寺四〇世の宗山禅梁(？—一八七〇)が「靈樹山日用清規曰」として記した短編の文書で、耕雲寺における日用行事が五位を究竟とすべきことが述べられている。おそらく当時は『靈樹山日用清規』という耕雲寺の清規(山内規)が存したのであろう。「法位餅之事」は、耕雲寺で用いる円餅一枚・六角餅六枚(白餅三枚と黒餅三枚)を示したものであり、偏位と正位による五位思想にちなんでいる。「杜澤三社記」は、耕雲寺の鎮守である杜沢三社にちなむものであり、寛政一〇年(一七九八)八月に耕雲寺三四世の大鼎宜寛(？—一八〇九)が撰している。

「書状」では、寛永一五年(一六三八)九月の堀丹後守直奇の書状、年不詳三月五日と五月八日の松平大和守直矩の書状、享保八年

(一七二二)四月二三日の関三利からの随意会免牌、安永六年(一七七七)九月の総持寺からの示達、文久三年(一八六三)八月一日の総持寺五院よりの本山住持職の示達、同年一〇月二四日の天然道器(？—一八七一)の本山住持職の事、明治三年(一八七〇)九月二二日の総持寺の免章と免牘、および明治五年一〇月の両本山可標を挙げている。

「寺領寄進状」では、耕雲寺所蔵のものとして明治五年(一四九六)閏二月の越後国守護上杉房能の寺領寄進状をはじめ一七種の古文書を載せ、また他家所蔵のものとして応永二六年(一四一九)二月の沙弥道讚の「奉寄進田之事」をはじめ九種の中世文書を載せている。

「耕雲寺領納所方田帳」(正式には『靈樹山耕雲禅寺納所方田地之帳』一冊)は、耕雲寺所蔵の史料で、永正六年(一五〇九)九月に誌された耕雲寺の寺領の納帳である。中世末期の耕雲寺の実態を知る上では貴重なものであり、とくに鑄物師屋との関わりが注目される。「訴状關係」では、元禄六年(一六九三)九月に関三利に提出した総持寺輪住を辞退する「乍恐訴状之事」や、正徳五年(一七一五)八月に寺社奉行に提出した慈光寺との本末異論の「申渡之覚」(慈光寺所蔵)などを載せている。

「参考資料」としては、「明治十六年、新潟県への書上」として明治一六年八月に新潟県に提出した寺院明細を挙げ、「昭和十二年当時の耕雲寺」として寺の沿革や七堂伽藍、末寺の数及び分布状態、さらに当時の伽藍の間取図を収めている。

「耕雲寺年表」では、正治二年(一一〇〇)の道元の出生にはじま

り、能勝・謙宗の事跡を中心に耕雲寺六〇〇年間の歴史を年表形式で列挙しており、能勝ゆかりの楠木氏の動向などにも意を注いでいる。末尾の「あとがき」は、鈴木氏自身が平成六年一月一日に記しており、本書を編集するに至った過程などが述べられている。独力で本書を刊行し得た鈴木氏の苦勞が偲ばれよう。

このように本書は傑堂能勝・南英謙宗・瑚海仲珊という耕雲寺三代の著述を中心にまとめられたものであり、まさに中世曹洞宗における五位の研究、曹洞宗旨の参究にかけた禅者たちの輝かしい事跡を一書に収録して成ったものなのである。その点では中世曹洞宗の思想面の研究の上で欠くことができない文献でもあり、総合的な五位研究を目指す上で基本資料が集大成されたともいえよう。

ただ、本書はほとんどが漢文資料によって占められており、しかも難解な五位の宗旨を頌のかたちで表現したものであることから、容易にその内容を理解することは難しい。実際のところ、私なども五位に関する偈頌についてはほとんどの確な理解を下し得ない状況にある。

ところで、能勝・謙宗ともに中国禅に対する素養はきわめて深く、経典・祖録に対する学識も十分なものが見られる。とりわけ謙宗などは五山禅僧としても一流であったといつてよく、そうした優れた人材が五山叢林を離れて林下の曹洞宗教団に帰入しているところに、耕雲寺僧団の持つ学究的な一面を垣間みる思いがある。当時としては辺境の地であった越後北部において希有なる業績を遺し得たところに初期耕雲寺の息吹きが感じられる。

ところで、本書刊行の課題・問題点について触れておきたい。残

念ながら本書はその発行部数がわずか一五〇部ほどにすぎず、末寺や有縁の人々に配られたのみであり、いま一つ一般にまで知られていない。

また『靈樹山耕雲寺六百年誌』という書名を冠しながら、実際にはその大半が能勝と謙宗の著述をまとめた資料編として編集されており、タイトルと内容はかなりの相違が見られるのである。もちろん、耕雲寺は度重なる火災などで寺の歴史を詳細に記した史料に乏しいことから、編年体形式でいわゆる「靈樹山耕雲寺六百年誌」をまとめ上げることは容易ではなかったであろう。

さらに大部の資料について短期間に編集作業を完了したせいから、資料編の字句に誤字も見られ、読み方の誤りも存しないではない。しかも内容の難解なものが多いことから、句読点や振り仮名ルビなどを省いて掲載したことも残念であろう。仮名ルビや句読点は中世禅者が如何に資料を解読したかを知る上で重要な手がかりとなる。また各資料の書誌的位置づけはもちろん、異本のあるものについては対校・校注なども載せて欲しかったであろう。

では、本書編集の意義は如何なるところに存するのか。中世林下の歴史とくに曹洞宗史を学ぶ者にとって、本書は単に越後曹洞宗の展開を知るといふことのみでなく、諸方面から興味深い事実を提供していることであろう。南北朝・室町期の動向を禅宗の側から窺う点、従来、あまり明確ではなかった楠木氏出身の能勝の出自、耕雲寺僧団と永平寺との関わりを踏まえた天童山の南谷庵輪差の実態、その他にも多くの史実を窺うことができる。

また中世の禅思想とくに曹洞宗の五位の研究を志す者にとって、本書はまさに資料の宝庫といつてよい。そのままにしていたら

やがて散逸しかねない貴重な諸本が本書によって一同にまとめられたわけである。中国曹洞宗旨が日本禅林に如何に導入されていったか、如何に展開していったかを知る上でも重要であろう。

なお鈴木氏が本書を編集する上では、駒沢大学教授の河村孝道氏と駒沢大学講師で千葉県龍泉寺住職の椎名宏雄氏および愛知学院大学名誉教授で新潟県十日町市神宮寺住職の竹内道雄氏が、それぞれ資料の提供や判読など多くの面で貴重な助言をなしていることが記されている。私がこの新刊紹介を著したのも、椎名氏より依頼を受けたことにちなむのであり、鈴木氏の功績を顕彰せんためである。

この新刊紹介を執筆し終えて校正も進んだ段階で、岩室村種月寺発行の『種月寺』（平成八年一〇月、新潟日報事業社製作）という小冊子（八八頁）を寒河江眞爾老師より頂戴した。これは種月寺本堂が平成元年（一九八九）九月に国重要文化財に指定されたのを記念してまとめられた写真入りの紹介書であるが、耕雲寺といい、種月寺といい、ようやく世間にその存在意義や歴史的価値を表明せんとする意気込みが伝わってくる思いである。

耕雲寺が中世曹洞宗史上に占める位置を踏まえれば、今回の本書の刊行はまさに画期的な事業であったといつてよからう。資料編が中心であることから、勢い一般の読者には馴染みにくいものであるが、こうした散逸しやすい貴重な文献が一書にまとめられたことは、歴史的に大きな成果として位置づけられるはずであり、鈴木氏の真摯な情熱に敬意を表したい。

（村上市門前・靈樹山耕雲寺、平成七年四月一日発行、非売品、A五版、本文七一頁、グラビア八頁）

鈴木鉀三編『靈樹山耕雲寺六百年誌』（佐藤）